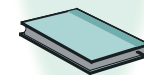


この本と私



キッチン

吉本 ばなな



角川文庫

以前から読みたかった本です。読み始めのところで、両親は早くに亡くなり、親類縁者も他界して祖母に育てられた主人公に出会います。その祖母も亡くなり、自分の居場所を探すところから物語は始まります。おばあさんが親しくしていた近所の花屋の店員さんから同居の申し出があり、父親がお母さん(?) になってしまった親子との共同生活が始まりました。花と緑に囲まれた部屋と申し分のない「キッチン」。干渉すぎない人間関係に主人公の「心」は癒され立ち直っていきます。人が「近い人」の死に出会ったとき、心は普通でいられなくなる。悲しいとか寂しいとか気持を表す言葉はあるけれど、それだけでは済まない、済ませられないココロがあって、占領されたり取り込まれたり、気付きがあって自身が変わっていく。私は日常的に「死」は考えにくいもの、考えたくない事と想っていた。死にたくはないけれど逃れられないもの、「死」を考え続けると、だんだんに生きている命を思い浮かべる。生きるために「いのち」を食べる。「生」と「死」が同時にあることを、より深く考えるキツカケになりました。「満月ーキッチン2」では、落ち込んでいる彼へ、なぜかカツ井を届ける事になり、庭石に飛び乗り、雨樋にぶら下がり屋根を伝って部屋へ行く、映画のようなシーンもあり、目の離せない読み物でもありました。著者はとても不思議な感覚を持ってしていると、感じ入りました。

聰子